



17
「犬」

誰かが椅子を引く音がすると、ちょっと胸がざわつく。

立ち上がる気配、その場から誰かが離れていこうとする前触れ。体が反応するのは、飲食店でバイトをしていた頃の癖がまだどこに残っているからかもしれない。

どこからともなく締めのお話が聞こえてきたり、誰かが上着の袖に手を通しかけたり。飲食のバイト経験者のような人が、手際よくお皿をまとめてくれたり。

「そろそろお会計かな」と察知したら伝票を準備し、預かっている荷物がないかを確認する。このタイミングでサービスの味噌汁やお茶を出すお店もあった。

椅子の音には、そういう「準備」の合図が含まれている気がして、今でもつい耳をそばだててしまう。

ふと思い出すのは、熊本で可愛がっていた犬のこと。

夕方、そろそろ主人が帰ってくる頃合いに、いつもの車のエンジン音がすると、その犬は玄関へ向かって一直線に走っていく。誰の車かちゃんと聞き分けていたのだろう。息を弾ませ、ドアが開くのを今か今かと待っている。

カラカラカラと音を立て、引き戸が開いた瞬間、飛びつくように迎える姿があまりにピュアで真っ直ぐで、自分が出迎えられた時は毎回なんとも言えない嬉しさが込み上げてきた。

いっしょに家にいるときは、僕よりも早く『その音』に気がつき、時を知らせてくれる。あの子にはいつもちゃんとわかっていたらしい。「帰ってきたよ」という気配を。あんなふうに全身で受け取ることができたならどんなにいいだろう。

椅子の音、コートの袖、車のエンジン。

日常にはそんな繊細なサインがいたるところに散らばっている。

犬のように駆け寄ることはむずかしいけれど、せめて、気づける人でありたいと思う。